



Title	日本版WISC-IVにおける検査行動チェックリストの信頼性及び妥当性の検討
Author(s)	田邊, 李江; 岡田, 智; 飯利, 知恵子 他
Citation	子ども発達臨床研究, 9, 57-61
Issue Date	2017-03-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.9.57
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65013
Type	departmental bulletin paper
File Information	57_1882-1707_9.pdf



日本版 WISC-IVにおける検査行動チェックリストの 信頼性及び妥当性の検討

田邊 李江¹⁾・岡田 智²⁾・飯利 知恵子³⁾
辻 義人⁴⁾・鳥居 深雪⁵⁾

Investigating the reliability and validity on the Test-Taking Behavior Checklist of the Japanese version of WISC-IV.

Rie TANABE, Satoshi OKADA, Chieko IIRI
Yoshihito TUJI, & Miyuki TORII

要 旨

本研究では、先行研究で作成した検査行動チェックリスト（Test-Taking Behavior Checklist：以下TBC）の尺度構成を検討した。結果として、下位尺度「意欲・協力的態度」「知的理解・言語理解」「不注意・衝動性」「社会性の困難」「情緒の問題」の信頼性及び妥当性が確認された。加えて、検査場面内の行動評定であるTBC「不注意・衝動性」「社会性の困難」と、日常場面の行動評定である「ADHD評価スケール」「PARS」との間に中程度の相関が示された。このことから、検査場面内の行動観察でADHDやASDの特性を一定程度把握することが可能であると示された一方、検査場面内の情報だけで測定値を解釈することは避け、生態学的観点を含む総合的な検査解釈を行うべきであることが再確認された。

キーワード：WISC-IV、検査行動、注意欠如・多動性障害、自閉症スペクトラム障害

Keyword：WISC-IV, Test-taking behavior, ADHD, ASD

1. 問題の所在と目的

発達障害は、Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition (DSM-5, American Psychiatric Association, 2013) から神経発達障害群として位置付き、その発達上の特

徴は知能や社会的技能の障害から、実行機能の制御や特異的な学習上の困難と多岐に渡る。また、発達障害のある子どもを理解する際は、個々の知的発達の遅れや偏りを把握することが重要であり、適切なアセスメントを通じた支援や配慮が必要と言われている（上野・海津・服部、2005）。現

1) 北海道大学大学院教育学院

2) 子ども臨床部門

3) ながやまメンタルクリニック

4) 小樽商科大学教育開発センター

5) 神戸大学大学院人間発達環境学研究科

在、発達障害のアセスメントで最も頻繁に利用される心理検査の一つに Wechsler 知能検査がある (Prifitera, Saklofske, & Weiss, 2005)。Wechsler 知能検査は、その大きな特徴として、幼児期から成人期に及ぶ幅広い年齢帯を網羅している点だけでなく、個人間差と個人内差の測定が可能である点が挙げられ、教育、医療、福祉等の分野で広く活用されてきた。また、研究的には発達障害の子どもの得点プロフィールの検討、及び検査結果に影響する要因の分析が行われており、解釈法に関する研究も数多く挙げられている。

さて、Wechsler 知能検査の児童版である The Wechsler Intelligence Scale for Children-IV (以下 WISC-IV、Wechsler, 2010) の解釈システムでは、基本的なプロフィール分析に関して 9 つのステップが設定されており、全検査 IQ や 4 つの指標得点といった大きな視点から、下位検査間の得点や行動反応の分析といった小さな視点へ移して検討を行うことが明示されている。ただ、下位検査得点のプロフィールや行動反応の分析は根拠に乏しく行うべきではないという批判も見られ、最近では下位検査や行動反応の解釈は慎重に行うことが明示されるようになった (Prifitera et al., 2005)。その一方で、日本版 WISC-IV 補助マニュアル (Wechsler, 2014) では、受検者の背景情報や学力の状況といった生態学的観点を含む様々な情報を考慮することの意義が強調されており、検査結果を総合的に解釈することが重要であると述べられている。つまり、指標得点の解釈は、数値の安定性や信頼性の担保を重視する立場が優勢である一方、臨床的にはマニュアルに挙げられている測定概念との機械的な対応では不十分なことも多く、複数の付加的観点や測定値の影響因についても考慮して解釈を行うことが必要と言えよう。

上記の課題を受け、岡田・田邊・飯利・小林・鳥居 (2015) は生態学的観点による総合的な情報収集の一つとして検査行動アセスメントを取り上げ、既存の行動観察フォームや尺度を概観して検査行動チェックリスト (Test-Taking Behavior Checklist) を作成した。そして、事例研究から、

検査行動アセスメントには、測定値の解釈を裏付けたり、測定値に現れない状態を把握できたりする意義があることを強調した。しかしながら、この研究では 2 事例の臨床適用のみから測定値と検査行動の関連が考察されており、尺度の信頼性や妥当性に関する検討が行われていない。そこで本研究では、臨床サンプルのデータを収集し、尺度の統計的検討を行う。

2. 方 法

(1) 調査期間及び対象

本研究の対象は、2014 年 12 月から 2015 年 9 月の期間に筆者らの所属する機関に来談した子ども 74 名 (平均 9.9 歳、範囲：5 歳-15 歳) である。収集したデータは、個人が特定されないように名前や所属等を記入せず、回収、及び保管した。また、保護者へ研究協力を依頼する際は、個人が特定されないことや回収した情報は速やかにデータ化してシュレッダー処理を行うことを伝えて同意を得た。また、検査実施や情報提供に関して、いつでも協力を取りやめることができる旨を子どもと保護者へ伝えた。本研究は、2015 年 1 月に北海道大学教育学研究院の研究倫理審査において承認を受けた (承認番号 14-16)。

(2) 調査内容と調査手続き

実施した尺度は、①日本版 WISC-IV (Wechsler, 2010)、②PARS テキスト改訂版 短縮版 (Pervasive Developmental Disorders Autism Society Japan Rating Scale-Text Revision 短縮版：以下 PARS、一般社団法人発達障害支援のための評価研究会、2013)、③ADHD 評価スケール (ADHD Rating Scale-IV：以下 ADHD-RS、DuPaul, Power, Anastopoulos, & Reid, 1998)、④TBC (岡田ら、2015) である。②PARS、及び③ADHD-RS は、日常生活で見られる自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder：以下 ASD) や注意欠如・多動性障害 (Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder：以下 ADHD) の困難性を評価

する尺度として、広く利用されている尺度である。なお、WISC-IV は 10 の基本検査を実施した。

本研究は、筆者らが関係する地域の教育、相談、医療へ調査案内を出して協力者を募った。子どもへの WISC-IV 実施と並行して、別の調査者が保護者から日常生活の聞き取りを行い、同時に PARS、ADHD-RS を実施した。TBC は、WISC-IV の実施後すぐに検査者が評定を行った。第一著者、第二著者、第三著者がペアとなり、これらの調査を担当した。

(3) TBC の構成について

TBC は、Wechsler 知能検査の行動観察フォームである The Guide to the Assessment of Test Session Behavior for the WISC-III and the WIAT (Glutting & Oakland, 1993) や Test Observation Form (McConaughy & Achenbach, 2004)、WISC-III 行動観察の観点 (上野ら、2005) 等の、国内外の検査行動アセスメントの項目を参考に作成したものである。TBC は、「意欲・協力的態度」5 項目、「知的理解・言語理解」6 項目、「不注意・衝動性」6 項目、「社会性の困難」8 項目、「こだわり・切りかえの困難」6 項目、「情緒の問題」5 項目の 6 尺度 36 項目から構成される。検査者が検査中の子どもの様子を、0 (当てはまらない／みられなかった) から 2 (よくあてはまる／頻繁にみられた) の 3 件法で評定した。分析の際は「不注意・衝動性」「社会性の困難」「こだわり・切りかえの困難」「情緒の問題」の項目を反転させ、「注意・集中」「社会性」「切りかえ」「情緒の安定性」と尺度名を変更した。得点が低いほど困難があることを示し、分析は各尺度の平均点を用いた (以下 TBC の各尺度を「意欲」「理解」「注意」「社会」「切りかえ」「情緒」とする)。

(4) 分析方法

TBC の各下位尺度の構成概念妥当性を調べるために、それぞれの下位尺度で主成分分析を行った。第一成分への成分量が高いもので尺度を構成し、その後に内部一貫性の指標である Cronbach

の α 係数を算出して信頼性を検討した。加えて、TBC「理解」と WISC-IV 全検査 IQ、TBC「注意」と ADHD-RS、TBC「社会」と PARS との間で Pearson の積率相関係数を算出し、基準関連妥当性を検討した。統計分析は、SPSS 19.0 と Amos 19.0 を用いた。

3. 結 果

TBC の各尺度の主成分分析の結果は、固有値の減衰状況と第一成分への寄与率から、「意欲」「理解」「注意」「情緒」の下位尺度において第一成分解が採用された。「社会」は、項目 18 (「状況を察して振る舞うことが難しかった」) の主成分負荷量が同尺度内の項目に比べて低い値を示したため (.25)、この項目を除外して再度分析を行い、第一主成分を採用した。なお、「切りかえ」は第一成分への寄与率 (25.5) が低いことから、一つの成分に集約して合成得点を算出することが困難と判断し、尺度ごとの分析から除外した。「意欲」「理解」「注意」「社会」「情緒」の第一成分への寄与率 (%) は、50.57、68.22、54.87、45.24、49.44 であった。また、これらの尺度における各質問項目の第一主成分への負荷量は、いずれも .40 を越えており、「切りかえ」を除く 5 つの下位尺度で構成概念妥当性が確認された。

「意欲」「理解」「注意」「社会」「情緒」を TBC 下位尺度として確定し、それぞれの α 係数を算出した (表 1)。結果、いずれの尺度でも α 係数が .70 を超え、十分な信頼性が確認された。

次に、TBC の基準関連妥当性を確認するために、TBC「理解」の得点と WISC-IV 全検査 IQ、TBC「注意」と ADHD-RS (合計得点)、TBC「社会」と PARS との間で Pearson の積率相関係数を算出した (表 2)。結果、いずれの変数間でも中程度の相関関係を示した。

4. 考 察

TBC の各下位尺度に行なった主成分分析の結

表 1. TBC の α 係数

「意欲」	0.71
「理解」	0.90
「注意」	0.83
「社会」	0.79
「情緒」	0.73
「切りかえ」	0.31

果から、「意欲」「理解」「注意」「社会」「情緒」がそれぞれ単独で1つの成分構造となることが確認された。また5つの尺度の α 係数からは、それぞれの下位尺度における信頼性が許容範囲内にあることを確認した。その一方、「切りかえ」の項目は、主成分分析等の結果から一つの尺度として質問項目を集約することは困難であり、他の尺度と同様の検討を行うことが出来なかった。実際に、今回の対象者で「切りかえ」に含まれる質問項目に関する困難が示されたケースは少なく、項目同士の関連性が低いことも明らかとなった。この点に関しては、多くの検査場面では刺激を統制することで物理的な構造化がなされており、該当の尺度で測定されうる固執傾向や切りかえの困難等の反復的な行動様式が喚起されにくかった可能性も考えられる。加えて、「切りかえ」尺度に含まれる質問項目が、本質的に検査場面内の行動特徴を評定しうるか否かについては疑問が残り、この尺度の妥当性に関する課題も残された。

また、TBC「理解」「注意」「社会」と、基準とする他の尺度との間に中程度の関連が示されたことから、これら3つの尺度に関する基準関連妥当性が確認され、TBCを用いることで、知的理解の程度、ADHD特性、及びASD特性に関する行動を一定程度は把握することが可能であると示唆された。加えて、ここで興味深い点は、TBC「注意」「社会」得点とADHD-RS、PARS得点との間に示された相関係数が中程度に留まったところにある。そもそも、TBCは「検査場面内」の子どもの状態を表す変数である一方で、ADHD-RSやPARSは「検査場面外」の子どもの特性を表す変数であり、同一の子どもであっても評定される行動が生起する場面や状況が異なっている。今回の

表 2. 基準関連妥当性の検討

	WISC-IV 全検査 IQ	ADHD-RS	PARS
TBC「理解」	.58		
TBC「注意」		-.59	
TBC「社会」			-.51

注：1%水準で有意な相関係数のみ掲載。

結果で検査場面内外の行動評定に相違性が見られたことから、各々のアセスメントツールによって異なる側面が評価されていることが明らかになり、生態学的な文脈 (Ecological context) から包括的なアセスメントを行うことの重要性 (Saklofske et al., 2005) が再確認されたと言えるだろう。

5. 今後の課題とまとめ

一つ目に、本研究では「切りかえ」尺度において内部一貫性が確認されず、合成得点を算出することができなかった。こだわりや切りかえの困難は、日常生活における学習面や集団参加の面で適応状況や対人関係上の困難と密接に関係すると言われていることから (Saulnier & Ventola, 2012)、今後は「切りかえ」に含まれる質問項目を再検討し、測定値との関連を吟味する必要があると言えよう。

二つ目に、本研究ではアセスメントの観点として運動面や言語面を含んでいないことも課題として挙げられる。例えば、日本版 WISC-IV 補助マニュアル (Wechsler, 2014) では、指標得点の一つが示す能力として「視覚-運動の協応」も挙げられている。また、音韻、統語、及び語用などの言語反応の質的分析についても重要な観点であることを考慮すると、今後は運動面や言語面に関する項目も検討する必要があるだろう。

最後に、本研究では尺度作成を主な目的とした先行研究を発展させて、数量的に TBC の尺度構成を検証した。今後は、評定者間や評定者内一致率等の検討も含めて、尺度の精度を確認、向上させることが必要と言えよう。加えて、TBC の臨床適用を重ね、WISC-IV 測定値との関連、及び特定

の臨床群における TBC の得点傾向を数量的に示すことを通して、包括的な検査解釈システムへの寄与が期待される。

6. 謝 辞

本研究のデータ収集に関して、ご協力をいただいた子ども達、及び保護者の皆さまへ感謝を申し上げます。本研究の一部は、平成 25 年度～27 年度科学研究費補助金（発達障害のある子どもの日本版 WISC-IV の妥当性と臨床適用に関する研究）の助成を受けました。

文 献

- American Psychiatric Association. (2013): *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed)*. American Psychiatric Pub, Washington DC.
- DuPaul, G. J., Power, T. J., Anastopoulos, A. D., & Reid, R. (1998): *ADHD Rating Scale-IV: Checklists, Norms, and Clinical Interpretation*. Guilford Press, New York.
- Glutting, J. J. & Oakland, T. (1993): *Guide to the Assessment of Test Session Behavior for the WISC- III and WIAT*. Psychological Corporation, San Antonio.
- McConaughy, S. H. & Achenbach, T. M. (2004): *Manual for the Test Observation Form for Ages 2-18*. University of Vermont, Research Center for Children, Youth, & Families, Burlington.
- 岡田智・田邊李江・飯利智恵子・小林玄・鳥居深雪 (2015) : 日本版 WISC-IV における検査行動アセスメントの意義と実践的課題. 子ども発達臨床研究, 7, 23-35.
- 一般社団法人発達障害支援のための評価研究会 (2013) : PARS-TR PARS テキスト改訂版. スペクトラム出版社.
- Saklofske, D. H., Prifitera, A., Weiss, L. G., Rolfhus, E., & Zhu, J. (2005). Clinical interpretation of the WISC-IV FSIQ and GAI. In Prifitera, A., Saklofske, D. H., & Weiss, L. G. (Eds.), *WISC-IV clinical use and interpretation*. Elsevier Inc., California, pp.36-71.
- Saulnier, C. A. & Ventola, P. E. (2012): *Essentials of Autism Spectrum Disorders Evaluation and Assessment*. John Wiley & Sons, Inc., Hoboken, pp.28-33, pp.85-87.
- 上野一彦・海津亜希子・服部美佳子 (2005) : 軽度発達障害の心理アセスメント — WISC-III の上手な利用と事例 —. 日本文化科学社.
- Wechsler, D., 日本版 WISC-IV 刊行委員会訳編 (2010) : 日本版 WISC-IV 知能検査理論・解釈マニュアル. 日本文化科学社.
- Wechsler, D., 日本版 WISC-IV 刊行委員会訳編 (2014) : 日本版 WISC-IV 補助マニュアル. 日本文化科学社.